

2020年5月24日(日) 瑞穂キリスト教会 主日礼拝

メッセージ題 「たとえ散り散りになっても」

聖書：使徒言行録第8章1b～8節

牧師：秋山 義也



使徒言行録第2章において、聖霊の風を受けた使徒たちは、家の外に出ていきました。人々と出会い、福音を宣べ伝えたのです。反逆者イエスの弟子であることに変わりはありません。特にそのように敵視されていたのは、従来のユダヤ教の教えを重んじる人々、主イエスがしばしば論争をしたファリサイ派や律法学者という人々からでした。外に出て行くということは、その人々と主イエスが向き合ったように、論争をするということを意味していました。律法に書かれていることをなぜ守れないのか、という上から目線の裁きを行っていた人々に対して、神の愛故に律法があることを、主イエスの弟子たちは語る者とされていったのでした。

聖霊は彼らを勇気づけ、多くの人々が増し加えられていきました。(使徒2章40節以下) 主イエスの言われたように、「互いに愛し合う」(ヨハネ15:17) 生活を進んで行い、人々は彼らに好意を寄せたのです。主イエスを救い主と受け入れる人も多くいました。そのような家庭における、交わり、パンの分かち合い、礼拝が教会の原型となっていきました。

しかし、そのような人目につくような集団になっていくと、その内外から様々な問題が起きてくるのです。一つに、言葉の問題がありました。使徒6章において、ヘブライ語を話すユダヤ人とギリシア語を話すユダヤ人の間で、理解し合えないことで起きる摩擦。特に共同体の中で弱い立場にあったやもめが、十分に食糧を受けていないとの苦情の声が出てきました。教会の責任を負う使徒たちは、応答しました。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」(使徒6:2～4) 自分たちの御言葉と祈りが疎かになることはよくない。だから、新しい奉仕者を立て、皆で補い合おうとしたのです。そして7人の執事が立てられ、今この働きは私たちの教会においても大事な執り成し手、一つひとつの声に耳を傾けながら、主がどう言っておられるのかを教会全体で共有していく務め。祈りと励ましの務めが引き継がれているのです。

もう1つの問題は、この執事の一人ステファノが民衆の間で福音を語っている時に、それを良しと思わないユダヤ教の人々が彼を捉え、最高法院、つまり裁きの場に連れだしたのです。キリストを証しすることで、その人の人生が脅かされる。彼はある意味、見せしめにされたのでした。そうすることで、主イエスと同様に異端的な教えを封殺することができると、キリスト者を敵視する人たちは考えたのです。

しかし、ステファノは大祭司の前においても、臆せず語り続けました。アブラハムの歴史から、主イエスに至る道と共に、神殿、神殿と言いながら、神と隣人を本当に愛しているのか、と自分たちの罪を紐解き、敵対者たちにその信仰の思いをぶつけたのでした。彼らは激怒しました。自分たちだけでなく、神の住まいである神殿を、また信仰の祖先たちを汚されたと感じたからでした。ステファノめがけて一斉に襲いかかり、石を投げ、彼を殺害したのでした。

聖霊を受けて、彼らは自由を得ました。しかし、その聖霊の風とは、しばしば向かい風でした。様々な人々との出会いから、好意を受け、主への信仰に至ることがあれば、敵意を受け拒絶されることもありました。問題だらけ。課題だらけでした。復活の主イエスに出会っていなかったのであれば、彼らはそのような風を受けて、また十字架につけられる前のように散り散りになって、ふさぎ込んでいたでしょう。聖霊を受けなければ、彼らは人目を避けてキリストを隠して、暮らしていたでしょう。しかし、聖霊の風を受けた時、キリストによって生きる者は、人生に只中にやってくる向かい風の中でも、尚、「救いがここにある」と証しする者とされていくのです。

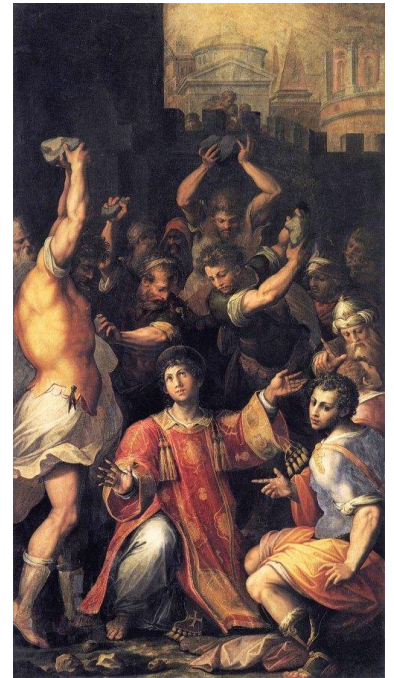
ステファノが、使徒ではなかったにもかかわらず、主を証しする説教者として立ったことは大変ユニークなことです。使徒たちは「わたしたちは御言葉と祈りに専念する」（使徒6：4）と言って、執事たちを会衆から選びました。その働きは、敵対する両者を和解に導く働きでした。しかし、その働きを越えて、彼らは各々の出会いの現場において、キリストを語る者とされるのです。あなたはこの仕事だけをやっていればいい、というのではなく、全てのキリスト者が、このようにそれぞれの場所で、それぞれの言葉で語る者とされるのです。コリントの手紙I、14章31～32節に「皆が共に学び、皆が共に励まされるように、一人ひとりが皆、預言できるようにしなさい。預言者に働きかける霊は、預言者の意に服するはずです。」とあります。皆一人ひとりが御言葉を語る者とされる。大人も子どもも、キリストを証しする者とされる。順風の時も向かい風の時もです。これがペンテコステを通して建てられたキリスト教会のわざです。

私は今日の聖書の箇所から、数年前から始まっている、一人の壮年、Sさんのメッセージ奉仕にハッとさせられます。私たちの教派には、東京バプテスト神学校という通信・夜間制の神学校があるのですが、その神学校ではここ数年、教会単位で受講できる、正に今この時代に浸透し始めている「オンライン講座」があり、「信徒と牧師が共に学ぶ説教」という授業があるのです。数年前、私の出身教会である、上尾教会も複数人で受講したそうですが、鈴木さんもその一人でした。信仰の篤い人であった彼は、学びを終えた後、自宅近くのターミナル駅の一隅で、行政の許可をもらって、毎週1回のメッセージを行っているのです。路傍伝道というスタイルですが、道行く人の前で語り、中には耳を傾けてくださる人との出会いもあるそうです。説教を学んだら、教会で、礼拝で語る、というだけでなく、このように全くの自由に、語る場が備えられ、そこに出かけて行く。出会いに行く。聖霊の働きがここにあることを教えられるのです。

教会の大事な一人であるステファノが殺害される。教会全体に迫害の波が襲ってきました。一人を打ったのですから、殺した人々は自分たちの行いを正当化し、次々にキリスト者の家を襲ったのです。その筆頭がサウロ、後に主イエスと出会い、主イエスに赦され、主イエスを受け入れ、主イエスを宣べ伝える人となった、パウロでした。彼は、厳格なユダヤ教徒であり、キリスト教徒を異端とみなしていました。似て非なる者が赦せない。そのような思いの中で、彼は律法で武装し、破壊を繰り返したのです。

教会に集っていた人々は、皆散り散りになりました。中には、エルサレムにとどまった人がいました。彼らは、信仰の交わりのあった、ステファノを葬ったのです。悲しみの中にとどまったのです。自分たちが危険の中にあることはよく分かっていたでしょう。葬りの最中に、押し寄せてくる迫害があったかもしれません。しかし、彼らはステファノとの愛の交わりを思い返し、葬ったのです。

コロナ禍において、葬りの出来事は一つの課題を、私たちに与えてくれています。葬儀が、集まってできない、ということに対して、どう応じるのかということです。いくつかの教会でこの期間、葬儀があったことを伺っています。人数を制限して行った。一日、お別れの時として、会堂に自由に出入りしてご遺体と面会し、祈ってもらった、等。何とかして、その時を備えて、御言葉の慰めを語っている牧師の姿に、教会の思いに励まされました。どんな時でも一人の死を大切に覚え、悲しみ、葬りの時を過ごせる、キリスト者にとって、ステファノの葬りからまた励ましをいただきます。



一方で、散り散りになった人びとが何をしていたのか。その行先で身を隠していたのではありません。キリストを捨てたのでもありません。そこで、ますます福音を伝えながら巡り歩いたのです。執事の一人にフィリポがいました。彼もステファノの死によって、散らされた一人でしたが、その生き方は、ステファノの思いと共にありました。彼と同じように、いつでもどんな場所でも福音を語ったのです。その行きついた先は、サマリアの町でした。

ヨハネ福音書4章には、サマリアの女性と主イエスとの出会いの話が載っています。このところにおいて、ユダヤ人とサマリア人は交流しないことが明らかにされています。サマリア人、その町は、かつて同じユダヤの民でしたが、アッシリアに滅ぼされた際に、多民族、他宗教が入り込み、ユダヤ人たちにとって避けるべき場所、人々となっていたのです。

この場所に、迫害が起きたエルサレムから散った人たちが行きついたのです。

彼らは意気消沈していませんでした。そこで主イエスを宣べ伝えたのです。それまでであったユダヤ人・サマリア人という垣根を越えて、彼らはただ、主イエスの福音を伝えました。それは、サマリア人を愛し、共に礼拝する日を臨んでいた主イエスの思いが彼らと共にあったからでもあります。サマリアの人々もまた、散らされたキリスト者たちを迎え入れました。彼らの行うしるしを見聞きし、話を聴き入ったのです。汚れた霊にとりつかれている人たち、中風患者や足の不自由な人もいやしてもらったのです。御言葉を宣べ伝えることと、回復のわざが一つであったことが分かります。そして、街の人々は、大変喜んだのです。(8節) 一人の回復、一人が助けられたことを持って喜びを分かち合う。そして、この人々が語る主イエスとは、救い主なのだと心に沁み込んできたのです。

コロナ禍のことで、私たちは病による恐れを抱いています。病に罹った人の声を聞く中で、病自体も苦しかったけれど、感染させられるのではないかと周りから思われるのではないか、避けられるのではないか、差別されるのではないか、そう思うと、前の環境、人間関係に戻れるのか不安と、何人もの人が語っているのを新聞やニュースで耳にしました。病の苦しみだけではなく、感染させてしまう、されたくないという感情が、他者を傷つけ、病の恐れを増幅させているのです。これと同様のできごとが主イエスの時代にもありました。病の痛みと共に、そのことで人から差別される痛み。家族が受ける痛み。二重、三重の痛みがあったのです。



しかし、今日、私たちは聖書から学ぶのです。迫害を受けて尚、散らされることがある。今いるここではない場所で、生きることになるかもしれない。でもそこでまた、他者と出会い、生きることができる。そして、御言葉を語り、隣人の健康を覚えることができるのです。

私たちは、この世界にあって、大事にしたいのです。それは、今日何人が天に帰っていた、ということ。コロナだけでなく、先に述べた葬りの出来事。一人の人の死を大切に覚えていくことを大切にしたいのです。

そして、それと共に一人の人が今日回復をした、という出来事を、しっかりと見つめたい。今日、何人の人が退院した。そのニュースを、心から喜び合いたいのです。「おめでとう」「よかった」と、心合わせて、その言葉を贈りたいのです。海外で、90才、100才の人がコロナから回復して退院したというニュースを目にしました。医療従事者、家族皆が喜んでいる顔が印象的でした。病になってしまって、申し訳ない、という気持ちで、果たして治ったことも喜べるでしょうか？

私たちはもっと、謙遜に生きたい。健康が自分のものではないこと。自分で100%アンダーコントロールできないことを学び、神さまから備えられているものであることを心に留めたいのです。だからこそ、回復もまた神さまからきているものであることを受け、サマリアの町の人たちのように、一人の人の回復を、喜び、神さまに感謝したいのです。

今、この時代におけるキリスト者、クリスチャンの強みの1つは、「助けられたという経験」を大胆に語るができる、ということです。弱さを誇るができる（Ⅱコリント12章）ことです。自分は助けられたことなどない、そう思っている人は、他者の弱さを認めることはできません。そうなったのは自己責任という言葉しか投げかけられません。しかし、それはまた自分に返ってくる言葉であることを、コロナのことは教えてくれます。誰しもが病になることがあるのです。しかし、そこで私たちは、助けて、と言っているのだ。救われた、本当に良かったと、胸をなでおろしてよいのだ、そのようにして、私たちは他者の苦しい時、痛み、病の時を思うことが出来、私たちが愛の言葉に生きることができることを知るのです。「お大事に」「回復、おめでとう」。散り散りになっても、そのような出会いの中でいつも主が共にいることを知るのであれば、私たちはどこにいても、一人ではありません。礼拝にまた集うことができる。しかし、その日がいつになっても、それぞれのところで、私たちは「私は主によって助けられました」と証ししつつ、この一週も新しく生かされていきましょう！

